

---

# うらら嬢の含羞

三条司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

うすら嬢の含羞

### 【Nコード】

N4735I

### 【作者名】

三条司

### 【あらすじ】

「雨もしたたる良い河童」の小さな番外編です。

神社の跡取り娘、黄本うすら嬢。花も恥じらう女子高生だったはずなのに、何故だか出会ってしまったのは、河童の美青年。艱難辛苦を乗り越えて、変態河童を好きだと認めてしまったうすら嬢には、更なる試練が待ち受けているみたいで……。

## (前書き)

お久しぶりです。三条をお知りの皆様。

最近、とんと更新出来ていませんで、本当に申し訳ありません。

短いお話ではありますが、いまだに、ラブコールがやまない変態出島さんとツンデレっつら嬢のーコマをお送りしたいと思います。

龍神が、おじいちゃんが、家に来ていることは知っていた。何故って、数日前から出島さんがうるさかったからだ。家をきれいにするとか言い出して、最終的には大量の折り紙で、大量の紙輪っかをつくって、もろ和風の我が家の壁を飾っていた。ここは小学校のクリスマスパーティー会場じゃないっての。何がしたいんだらう、出島さん。

ただ、あたしとしては、おじいちゃんはやっぱり、おばあちゃんに会いに来てるんだらうなと思っていたから、ちよっと遠慮していたのだ。しかも、まだたすくには秘密にしておかないといけないらしい。ほら、たすくは、未だに「妖怪妖怪」って、鼻の穴膨らませて興奮してるから。真っ青の肌をして、真っ青の髪の毛の美男子が突如として「祖父だ」とかって現れたら、やっぱり一大事だらうと。その割には、出島さんがしでかしたデコレーションについて、たすくは何も聞かなかった。もしかしたら、出島さんの日頃の行いがあまりにも気持ち悪いので、多少の気持ち悪い行動では最早驚かなくなっているのかもしれない。恐るべし、出島菌。

だから、あたしの部屋の襖が何の前触れもなしに開いたとき、てつきりあの変態出島さんかと思ったの。露骨に嫌そうな顔をして、向かっていた机から振り向いたあたしは、そこに真っ青のひとを見つける。

「おじいちゃん」

「う、うらら」

驚いた声で呼ぶあたしに、おじいちゃんは何故だか狼狽えた声で

答えた。

「ど、どうしたの？」

つられて、あたしまでどもってしまつ。

「いや、その、あの、な」

勢い込んで入ってきた割には、急にもじもじし出すと、居心地悪そうに視線をさまよわせるおじいちゃん。苦虫を噛みつぶした顔のため息をついたかと思えば、大きく鼻から息を吸い、それからごくりとこちらまで聞こえる音をたてて喉を鳴らした。その間、両手は何を求めているのか虚空をつかんだり、着物の襟元をかき合わせたりと、つまりはとつても挙動不審。

「おじいちゃん？座る？」

その動作があまりにも情けないものだったので、あたしはそろそろと座布団を指さした。すると、おじいちゃんはやおら意を決したように顔を上げ、きりりとその端正な顔を引き締める。

「うらら。お前、あれか」

「ええ？」

「絹から聞いたんだけどよ」

「おばあちゃんから？」

「お前、その、いくつだ」

「17歳だけど」

「つかー、まだ子供じゃねえか」

「いや、そんなの、あたしも知ってるから。しかも、おじいちゃんがおばあちゃんに会ったとき、おばあちゃんは15歳だったよね

「？」

「絹は良いんだよ」

「何それ」

「それよかお前、17歳の小童のくせに、その、何だ」

「なに」

一向に当を得ないおじいちゃんとの押し問答に、だんだんと我慢が足りなくなってきたあたしは、つつい、きつい言い方をしてみよう。

「お前、河童と逢い引きしてやがんのか」

「は!?!」

そう言ってからあたしは氷河の塊のごとく固まり、おじいちゃんとは言えば、その年齢不詳な顔を歪めてじっと待っているようだった。

「え、な、何言ってる」

「絹から聞いたんだ!お前、あの出島浩平としんねこを決め込んでやがんのかっ」

「ちよっと、意味が分からないんだけど、それ」

古いよ、おじいちゃんの言い方はさ。

「だから!お前は、何だ、あの河童野郎と、ちちくりあってんのかって聞いてんだよ」

「ちちく!そんなことしてない!な、何言ってるの、おじいちゃん!というか、おばあちゃんが言ったの?あたしは、そんな、出島さんとは」

顔を真っ赤にして声を上げると、おじいちゃんは、しばし猜疑心の固まりのような瞳をこちらに向けていたけれど、そろそろと息をついた。目をきつく閉じて、安堵の息を吐くと、

「びつくりさせやがって。そうだよなあ、俺様の孫ともあるうお前が、河童と恋仲になるなんてよう」

「おじいちゃん、河童嫌いなのです？」

「別に？嫌いじゃねえよ。好きでもねえけどな。まあ、俺様は慕われ敬われる側だからよ。それにしても、絹のやつ、悪い冗談言いやがって。お前が、出島浩平のことを好きだなんて、なあ」

「……………」

「どうした、うららら？」

そのときのあたしの顔がどうなっていたかなんて、知らない。結局、自分の顔を見るのは、自分ではないのだから。だけど、怪訝そうに眉を寄せたおじいちゃんの表情から、あたしはまるっきりのポーカーフェイスを保つことは出来なかったのだと気付く。

「うららら？」

再度、声をかけてくるおじいちゃんに答えずにいると、ややあつてから、おじいちゃんは、大仰に頭を抱えた。

「うわああつ！お前、もしかしてっ！」

「お、大きな声、出さないでっ」

あの地獄耳の変態河童が、どこに潜んでいるとも分からないのに！

「う、う、うららら……………」お前、ひょっとして、す、す、好いてやがんのか、あの河童野郎のことを？」

かーっと血圧が上がるのを感じる。心臓が跳ね上がって、いつもの倍の速さでどくどくと鼓動を打ち始める。きつと耳まで真っ赤になってるんだ。半ば半泣きになりながら、あたしはこくりと頷いた。

「!!!!!!!!!!!!!!」

おじいちゃんの顔には、はっきりと『衝撃の事実、発覚』と書いてある。元々真っ青の肌が、更に青くなって、青い熱帯魚みたい。口をぱくぱくと、それこそ金魚のように開いたり閉じたりして、切れ長の瞳をまん丸にした。パントマイムのような仕草で、頭にやっただ両手をゆっくりおろすと、ムンクの叫びのポーズでかたまっせまう。

「う、うわああああ、き、絹~~~~~!!」

そう叫びながら、おじいちゃんが入ってきたときと同様、突風のごとき速さで部屋から出て行くと、廊下を走り去っていった。たぶん、おばあちゃんのことに行っただらうな。なぐさめてもらうのかな……。

ごめんね、おじいちゃん。

心の中で合掌をしたあたしは、もう一度、机に向き直った。

さて。宿題を片付けちゃわないと。

と、ふいに背後から、気味の悪い笑い声が聞こえてくる。ぐふぐふと、変質的な匂いを隠そうともしないその声に、あたしの肌が粟立つ。振り返ってはいけないと、あたしの理性は必死に説得を試みる



が、あたしの本能は、迫っている危険を無視出来ずにいた。下唇を噛んで、おそろおそろ振り返る。おじいちゃんが閉め忘れていつたふすまは、うつすらと開いたままになっていて、そこから顔半分だけを覗かせている生き物がいる。目を爛々と輝かせて、それは聞き慣れた声で呟いた。

「うふふふふふふふふ……。うららさんたら、照れ屋さん…」

さっきのおじいちゃんよろしく、あたしが顔面蒼白になったのは、言っただけでもない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4735i/>

---

うらら嬢の含羞

2010年10月10日04時03分発行